

私たちが住むことになった土地は湿地状態だったと書いたが、このあたりはどうだったのだろうか。この丘陵部の地質をみると全体的に火山性の土のようだ。地層を上から見ると、火山噴出物がベースの軽石質の砂に植物が堆積してできた泥炭が挟まったものから始まり、小さな軽石を含んだ泥炭質の粘土、その下に噴火の時に流れでたり降ってきた軽石の層がつづき、さらに下は粘土やそれよりやや大きい粒のシルトに泥炭質の粘土が見られるようだ。その下は安山岩質になるが、全体的に地表に近いところは軽石や粘土が多いようだ。丘陵の先端の低地に近い方では、明治の三十年代にそこで取れる粘土でレンガを焼いていて、今でもセラミック工場が見られる。このような地質だと地表に落ちた雨水はなかなか浸透しにくく溜まりがちになり、私たちの土地も湿地状態であったのはうなづける。

このような竹山に人が入ったのは明治二十七年頃とされており、当初は根曲がり竹に混じって生えていたイタヤやカバを使って炭焼きをされていたようだ。そのうち竹山の用材も尽き、遠くに出向き炭焼きを続けるかたわら、木を切ったあとを開墾して畑をつくっていたと記録にある。当時の風景を伝える写真はないので推測になるが、高木の姿はなく勢いの強い根曲竹が一面を覆って、ところどころに開墾された畑があるという状態だったのではないかと思う。基本的に、暮らしの場として人の手が入るところに鬱蒼とした森林が残ることはない。木々に囲まれた別荘地として有名な軽井沢や、雑木林が原風景のように言われる武蔵野も、明治の頃は一面草地であつたようだ。これもそうだったのではないだろうか。

竹山にまともに入って入植するようになるのは戦後すぐの昭和二十四年から二十七年頃である。樺太から引き上げて来られた方や、引き上げて他の地に新しい暮らしを求めてうまくいかなかった方などが、国から土地を斡旋されて竹山に入るのだが、それも大変だったようだ。近くにお住いのSさんは、当時のことを話されるときに普段の温和な顔とは違う表情を浮かべながら「ほんとに、あのころは辛かった。」と言われたのが印象に残っている。

国は酪農を奨励したようだった。確かに粘土質の土地で畑をつくるにしてもまともな土にするには時間がかかるので合理的な判断だったのかもしれないが、それでも斡旋された土地には一抱えもある木がたくさん生えていたようで、それを切って抜根するという重労働が求められたのだ。その頃には炭焼きで一旦失われた木々がまた大きく育っていたのだろうか。切った木の根っこを抜くのはとても大変な作業だったようで、Sさんのお父さんはS式抜根機というのまでつくられたそうだ。現在、竹山に住まわれている方々の多くは、そのような苦労を経験されていると聞く。

地区の集会所になっている竹山会館の壁には沢山の表彰状が飾ってある。それらはみな農業振興に竹山地区が貢献したことを讃えるもので、一九六〇年台の半ばには苦労が少し報われるようになったことがうかがえる。

